



アートから

“持続可能な観光”を創る

～「大地の芸術祭の里」の取り組み～ 新潟県十日町市

それぞれの地域が特徴を活かすことで、将来にわたって活力ある社会形成を目指す「地方創生」。全国の自治体は、持ち前の観光資源をいかにして“稼ぐ力”に変換していくか、さまざまな試行錯誤を繰り返している。1年の3分の1以上が降積雪期となる有数の豪雪地帯・新潟県十日町市では、地域おこしの一環として開催してきた「大地の芸術祭」をテコに、通年観光へと展望を開く取り組みに挑戦している。



アートから 持続可能な観光を創る

十日町市 人口50,522人、世帯数19,675戸（令和3年7月31日現在）長野県との県境・魚沼地方の中心で、東京から約200km、新潟から約100kmの地点に位置する。市中央を信濃川が南北に流れ、雄大な河岸段丘が見られる。平成17年4月1日、十日町市、川西町、中里村、松代町、松之山町の5市町村が新設合併して誕生。豪雪地として知られ、旧十日町市地域は古くから織物を主産業として発展、その周辺地域では良質な米が生産され、点在する集落や棚田などが美しい農村の景観を形成している。

◎「雪のまち」から「アートのまち」へ

日本一の大河・信濃川は秩父山地の甲武信岳を源流とし、長野県で千曲川、新潟県境からはその名を信濃川と変えて日本海に注ぐ。十日町市と津南町は、信濃川の最上流に位置し、中世から「妻有」と呼ばれてきた土地柄にある。四方を山に囲まれて行き詰まりの地形、あるいは川の最上流の「泊」が転訛したなど、由来には諸説あるが、その名を冠する「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」（以下、「芸術祭」）が産声を上げたのは平成12年のことであった。企画を担ったのは、民間の制作会社「(株)アートフロントギャラリー」である。

平成6年に県が立ち上げた広域活性化政策「ニューにいがた里創プラン」に則り、越後妻有の里山を舞台に3年に一度行われる国際芸術展で、アートの力で地域の魅力を引き出し、交流人口の拡大等を目指している。平成30年に第7回が開催された。

「最初、芸術などにお金をつぎ込むことに反対する意見は多かったですね、どんな効果があるか見えないと。第1回に参加した集落は28地区でしたが、回を重ねるにつれ賛同者も増えていき、第5回(平成24年)、市中心部に拠点となる「キナーレ」(令和3年7月22日「越後妻有里山現代美術館 MonET(モネ)」として生まれ変わった)が建てられた頃には、100集落を超えました」と話すのは、市観光交流課長の樋口正彰さん。市にある集落が400余であることから、12



きものまち 十日町 提供：(一社)十日町市観光協会
麻糸に強い縫りをかけて織り上げた越後縮の産地として知られ、明治以降は、その技法を絹糸に応用し、全国に知られるようになった。

年で市での認知度は大幅に向上したといえる。

それぞれの集落では作家を迎え、住民たちは作品制作に参加、おもてなしにも心を配り、多くの人たちとの交流の中から自分たちの地域の良さを再発見していった。

◎3年に一度のイベントから通年誘客へ

十日町市には、国宝「火焰型土器」に代表される縄文遺跡の数々、日本三大薬湯といわれる松之山温泉、柱状節理の峡谷美を誇る清津峡などの地域資源はあるものの、なかなか集客には結びつかなかった。

平成21年、芸術祭を契機に「NPO法人越後



車窓から見た棚田の景観

大地の芸術祭の10の思想のひとつ「アートを道しるべに里山を巡る旅」として、車窓からの景観もアートの中に位置付けられている。



越後松代棚田群 星峠の棚田 提供：(一社)十日町市観光協会



レアンドロ・エルリッヒ「Palimpsest：空の池」 Photo by Kioku Keizo

妻有里山協働機構が発足、芸術祭で生まれた作品や施設、プロジェクトを通年事業として運営し、芸術祭の運営はもちろん、メンテナンス、企画展・イベント等・ツアーの実施、各種販売、食宿泊施設運営、誘客促進を担うこととなった。ここに、芸術祭の企画を担う民間会社、NPO、そして行政が三位一体となった持続可能な芸術祭と通年事業の運営基盤ができあがった。

行政は予算の確保や芸術祭のバックアップとともに、各集落の意向調査を行い、その調査結果を企画会社に提供するなど、地域との調整に重要な役割を担っている。予算は3年の継続費として用意しているが、国(文化庁)からの支援に加え、趣旨に賛同する民間企業や個人による

寄附も重要な財源である。

平成30年には、地域資源と芸術祭の融合が実現した。清津峡観光のため、平成8年に整備された全長750mの「清津峡渓谷歩道トンネル」(以下、「清津峡トンネル」)が、第7回の芸術祭作品として生まれ変わったのである。「SNSの影響もあってか、芸術祭が終わった翌年に入場者数が激増したのには驚きました」と、樋口さんは当時を振り返る。

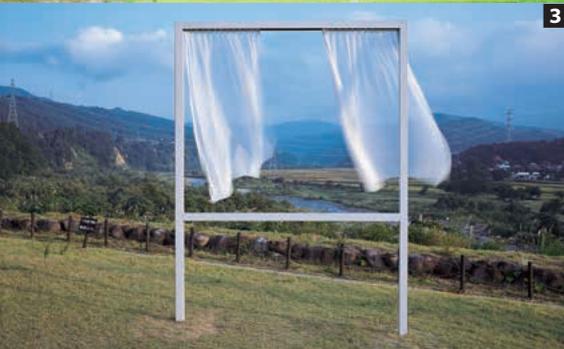
天候に左右されずに訪れることができ、トンネルの入料料は安定収入の確保につながる。峡谷美とのコラボもあり、観光周遊の大きな拠点となった。アートの力でトンネルの可能性が開花して、市の重要な観光資源となったのである。

【大地の芸術祭 ー10の思想】

- ①アートを道しるべに里山を巡る旅
- ②他者の土地にものをつくる
- ③人間は自然に内包される
- ④アートは地域を発見する
- ⑤あるものを活かし新しい価値をつくる
- ⑥地域・世代・ジャンルを超えた協働
- ⑦公共事業のアート化
- ⑧ユニークな拠点施設
- ⑨生活芸術
- ⑩グローバル/ローカル



2 4



3



1 田島征三「鉢&田島征三 絵本と木の実の美術館」 2 イリヤ&エミリア・カバコフ「棚田」 Photo by Nakamura Osamu 3 内海昭子「たくさんの失われた窓のために」 Photo by T.Kuratani 4 マ・ヤンソン/MADアーキテクト「Tunnel of Light」 Photo by Yamada Tsutomu 清津峡渓谷トンネルが生まれ変わり、大自然を取り込んだ壮大な芸術作品に昇華された。トンネルから開かれた見晴所の床には水が薄く張られ、天井にはステンレスの板が貼られており、風景が映り込むよう工夫されている。5 6 「大地の芸術祭」では地域住民によるおもてなしや地元サポーターの活躍が欠かせない (5 Photo by Yanagi Ayumi 6 Photo by Nakamura Osamu)。





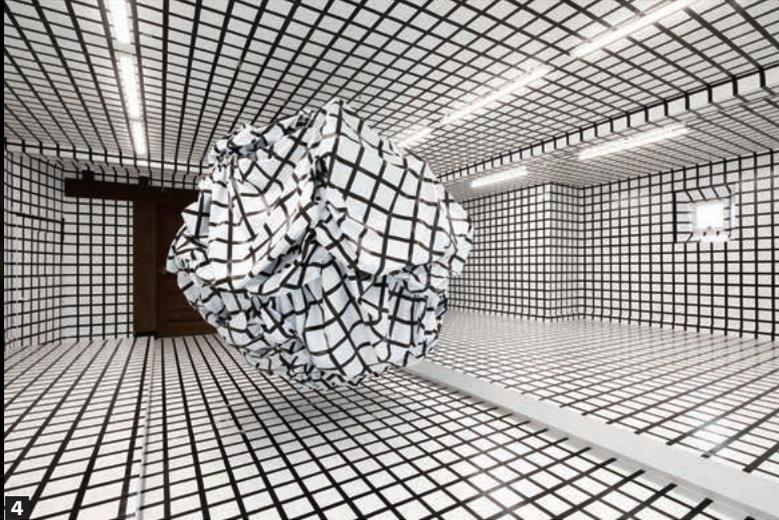
1



2



3



4

1 マ・ヤンソン/MADアーキテクト「Tunnel of Light」 Photo by Nakamura Osamu 新たに展開された清津峡渓谷トンネルの作品。トイレのある「第二見晴所」の内壁をペイントしたもので、渓谷の急流や風の流れを白黒で表現している。**2****3****4** 松代地域一帯を見渡す「松代城」。昭和56年に天守閣を模した展望台が建てられたが、今回、その内部に新作が公開された**(2)** 豊福亮「樂聚第」 Photo by Kioku Keizo **3** 鞍掛純一+日本大学芸術学部彫刻コース有志「脱皮する時」 Photo by Kioku Keizo **4** エステル・ストック「憧れの眺望」 Photo by Kioku Keizo

● アートと地域資源がもたらす可能性

第8回芸術祭は、令和3年7月24日から開催が予定されていた。しかし、新型コロナウイルスの影響を考慮し、同年4月に延期を発表した。「芸術祭は地域と一体になって行いますから、高齢者が多い集落での準備はできないと決断しました」と樋口さん。現在は令和4年夏季の開催を予定しているという。ただ、開催に向けて準備してきた既施設のリニューアル作品などは、当初の会期に合わせて、先行して公開に踏み切った。

集客の鍵を握る清津峡渓谷トンネルにも、新たな作品が加わった。アート作品を一つにつくりあげるのではなく、順番に整備し、イベントのたびに変化を感じられる趣向だ。

芸術祭と地域資源との相乗効果に可能性も見出せる。芸術祭は毎回、その時々時代の背景に応じた綿密なコンセプトが組み上がっているため、行政もスピード感をもった企画立案と実施が求められる。しかし、「令和2年の十日町雪まつりでは、芸術祭の冬イベントとコラボしました。今後も工夫して芸術祭の期間内に、縄文ツアーを開催してお客さまに参加していただくなど、うまくリンクできると考えています」。

令和2年には「究極の雪国とおかまち 一真説! 豪雪地ものがたり」が「日本遺産」に認定された十日町市。アイデアひとつで芸術祭の通年への波及は可能である。

「3年に一度の芸術祭が集客の頂点であるなら

ば、山をできるだけ平らにできるよう、通年イベントに積極的に取り組みたいですね」と樋口さん。

それでも課題は山積している。芸術祭で生まれた恒久作品のメンテナンスの負担は増えていく。市は、少しずつ作品を整理していく方向だが、それぞれの作品には地域の思い入れも強く、地域が保存を求めることもあり、壊すに壊せないという現状もあるという。

全集落での芸術祭への意向調査からも、さまざまな課題や要望が明らかになった。高齢化により参加が難しいという声が増えてきている一方で、市役所職員採用や地域おこし協力隊の募集では、芸術祭に関わりたいたいという声も数多く聞かれる。芸術祭自体が地域にしっかりと縫い込まれ、人々の大きなモチベーションになっていることがうかがえる。

里山の景観を体感した人々は、それをアートとして絶賛した。住民は、日常の景観が地域の大きな魅力の発信源であることを知り、誇りと希望に胸を膨らませた。アートを媒介にして、里山の在り方を再定義してみせたともいえる。

「文化や芸術は地域再生に無縁に見えます。でもアートは、地域の潜在的な力を引き出すことができるのです」と話す樋口さん。越後妻有の人々は、20年という時間を通じて、アートが地域活性の推進力になり得ることを証明してくれた。

【取材・写真協力 十日町市産業観光部観光交流課】



5

5 まつだい雪国農耕文化村センター「農舞台」雪国農耕文化とアートのフィールドミュージアム。イリヤ&エミリア・カバコフの新作4点が展示され、松代城の新作公開とともに、令和3年7月にリニューアルオープンした。